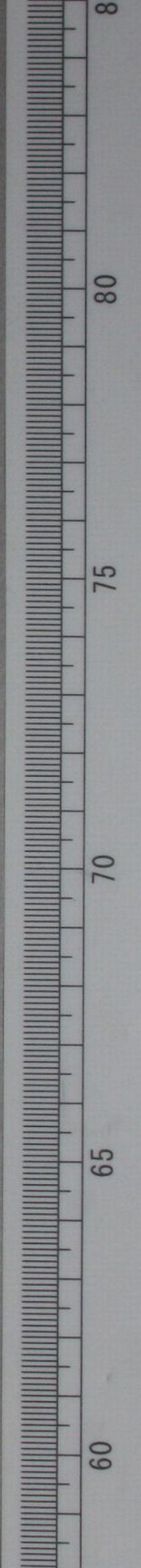




中村俊定文庫
文庫 18
250



元文二(序)

松乃花

楚璞選

全

子能

以色

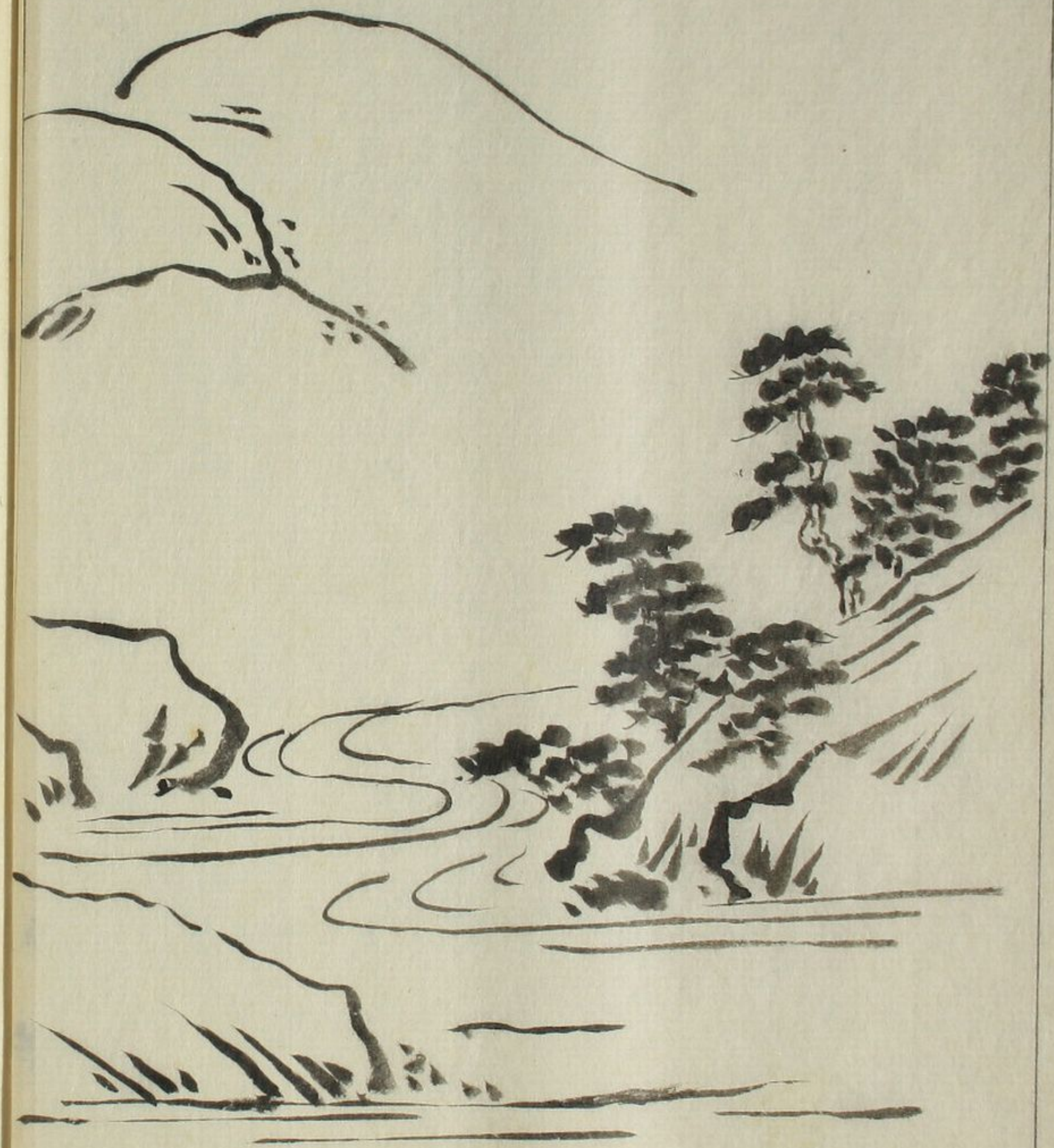


俳諧
松
琴

乙未書

卯文





席詞

美不廉草花苞——ほろきここの
 多し—その時亦、河原の野に
 ころもあま^美く、
 流るる川に人乃んを、風を吹
 かせぬ、おしきき、業花隠れ、大福
 乃他、おきき、川のある、杜子、芍薬
 名富き、ふめ、濃淡の、凡流、小天工

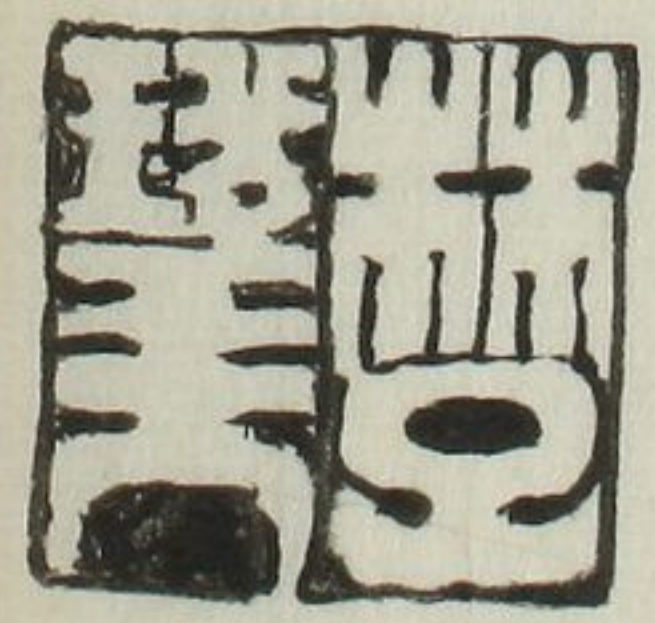
我歎有友儀の中に入をわやうはさる
 いむり此人の自然を樂むをせしふ
 劣りやまらん爰又予の堂ある松株
 乃松何ぞとみどり此木のあしむり
 や陰涼乃友まきくは樹下の睡る友
 乃は去るぬ他仙もかきくは一時の樂
 不五十年乃道色とる所あつて吟松の
 心算亦秋秋感しては實樹にほほむ

觀想とをまきけ言を面らふ掛りぬれ
 日ははあふくと紙筆のぬふ友を清く
 いら目よ耳ふこの揮を龍昇し書に
 畫亦此の象形は揮毫を然れり
 四時不名變化不遊ひ眼らよ名お望の風
 景をほくほくも百本乃長る然ありさ
 是と梅梅の色も香をわかれぬ葉をむ
 花葉を省きて爰に配冠とらふに君

に子此日のあまきよを何ぞ松葉子年
 乃らあちあて係の松塔乃芳とひとれ
 より亭主の好まぬ振舞は流るる乃次
 笑ハキぬ顔あるは

え文丁巳新日

松堂楚璞



松孔を家

美流

山方連中

庭之坊

雪の空にぬれ之を松乃を

清き草を掃りて溪の畔を

楚璞

能くをんやうを里おと目よ

呂柱

屏風に物魔おろして怪組

杉流

月小雲山の聯句此片律義

退々

富長子やう麻の尻を

尺兔

為那之海も新氣乃をあら

琴左

椽せんハ花も明多燭卷

東巴

拭少さるやうに日和をかくら

鷹仙

神をお旅此のまじり

葵明

片そハ新くむに髪さ(中)居る

璞

碓好乃家上はまらと注

之

二 後京北戸内徳満の娘屋敷守

沈

八卦又虚云を注以て注せる

杞

孫入之給乃室を懐(一)如也

兔

下馬(一)奥も遠以石壇

退

天和(一)鉞を左(一)次杉檜

巳

七(一)行(一)四(一)以(一)新(一)を(一)足(一)赤(一)珠

左

暮(一)夏(一)切(一)と(一)月(一)夜(一)を(一)飽(一)及(一)門(一)も(一)又

明

簾(一)阿(一)を(一)水(一)ハ(一)け(一)く(一)波(一)乃(一)秋

仙

三 厚(一)と(一)て(一)耳(一)そ(一)ハ(一)多(一)山(一)品(一)琵琶(一)法師

元

笑(一)以(一)さ(一)ら(一)う(一)り(一)此(一)情(一)の(一)ま(一)り(一)と

璞

永の日は暮らしてあは入花とと里 立里平

霧の山に下りし山も千生 院

名録

美作にふけ付く嵐の明 退二

ちねくに花枝をの柳の 呂柱

夜兼やまを結あつて日傘 東巴

いさおうやまのいさお口柳子 翠危

錦織糸乃下地やもまゝに 尺鬼

鈴虫よりかうんをてぬお神楽 葵明

釣をたおしりしらまふ山橋 磨仙

掃ち起る空や柳 又冬の有 秋院

松乃藤

柳後室生あよひ句を

乞ぬ

皇都

百阿

山にまをさめ次の鶴也松乃藤

山を落さるゝ行か乃毛

松璞

蛙啼りあ田尔牛と追ひ

杜吾

らかハ兄をともしくお髪

范字

北時乃松あきそ吐いも青月夜

一推

柿八年も夏のともり生

桂州

稻くさひ里ハいあとして町ま公

素仲

瘡下りおま神も松あ願

吾

夕晴乃空もにうくうらほきて

字

坂のそとにうら言も洗足

推

花子目を逃くやねやより川系

州

緯下りせうおく機織りけ

仲

縁付とある心替ハと免られん

吾

傘孔ちあみの海へどこても

字

板木の松

成ら福在

卯乃毛の新明こりや松の響

章吹

波を子苗もろよく演れ端

此環

る下り此刀り聲をんちえろ

岩芝

首倍乃松友を機の手体め

之甫

葉子さへ福てぬ月乃垣隣

山流

園子乃香を柳も種のは

虚白

七月かりも辨乃利とる後位棟

環

内義乃様よぬちのたき

吹

市此扱の行焼河も演底

甫

勢く星れうそがむろか象

芝

韃靼乃軍も今就むとや

白

唐の空より蝶もお伴

流

出都りも小神さくさの高印

吹

母此あま葉乃葉演こり

環

焼をよて途扱の位牌かけ立

芝

行脚の尾も居く八景 甫

おろし後山後雨もあむ酒おそ 流

師走を月夜をい苦うふい 白

水戸んころと足臭てんろんと所 環

かくくんと呼ぶ雨化の夜顔 吹

提言此謎も解くる善哉中 甫

思ふ月をむよるるにえづく 芝

けり家被の伊達もお刃拭い 白

笠屋よ東風のそをゆきし 流

名録

屋の葺きに酒吞せりう桃の花 虚白

竹立子てを男はさしう回植此日 山流

んせくま正男乃家や桐の花 之甫

夜あや測りり子かゝる時 岩芝

夕暮乃松 尾張名古屋

松よはし様の群や夕暮すこ 以之

都乃風も加わす 山位 瑛環

今時此大工を木の子種を 和碩

を余あふひう君をぬては 丁牧

大井川越て詠る有る程 竹取

遠風砦のまふゆ 鳥申

相思秋とちる若る恋の果 比誰

弁乃内侍のまてぬ日鹿 之

照るまじりハ新あてもあふ居是り 環

鞠場乃砂を云付く 碩

泣くねんと毒をアんて居るた 牧

二 然くと啼ん鐘々鳴 取

乙喜此まとう身に起る 申

村の新証書 誰

瓜 好 乃位持つ 之

洋瑠璃もちりと水まで高
 網方乃仕合ん申る海の毛
 その骨北陸の厚も二千里
 吸おの身も松茸の法を来
 赤ひ糸乃脱捨く^二申
 いさりのやうに吐を爺とし嫁し
 馬をよこまてま言流足
 門んいをも乃西日走んくれ^一隙

海まよあらし山のまを色
 流

各録

春もはるあまの限うや風巾
 草拵や様の時乃人平あま
 初おとせらあくらき^一魂あま
 長刀よれらぬ軽きや飛^一申
 何^一あまや指あまあまの奇麗好
 狐婦^一川花よもあれ^一是^一糸
 以之
 和破^一碩
 比^一誰
 香^一申
 行^一申
 丁^一牧

松の月 山中富山

二川

系此許又耐と姥とや松の月

捨りし小貝よやる初沙

遠葉を秋おを詠詠詠詠

雨舎りあまか形もい移く

白壁乃汚まも恙のぬてきり

蚊屋はくぬあし札札張点

筆刻も原とすす里里つけ

楚璞

麻父

沙香

烏角

巴丘

執筆

橋を道る悪の丸丸狭

夜を夜お小ぬそ居居かか鐘鐘まま

とらふ福もも瓦長香

巷守ハ鞠のの中もむも引

籠乃乃梓梓ああちち子子ささたた里

出代出里代ののアアててままやくやく香香送送

艾艾次次子子にに菘菘ももたいたいむむま

飼鳥飼もも香香をを入入るるふふ蟬蟬のの雨

川

璞

父

香

角

丘

璞

川

寝覚の里も夏ハ眠^レ以^テ鳥

加^レ衣長括乃^レ借^レを^レ鹿^ノき^レね^ハ父

牛^ノ商人^ノ方^ノ角^ノの^レあ^レ川^ノ丘

植^レ出^レ此^ノ種^ノも^レ彼^ノ又^ノある^レ月^ノの^レ秋^ノ角

子^ノ安^ノを^レや^レま^レて^レ踊^レえ^レる^レハ^レ川

赤^ニ以^テ物^ノ若^レれ^ハ蟻^ノ蛇^ノを^レほ^レ以^テく^ル璞

即^チも^レ外^ノの^レや^レう^ノ家^ノ新^ノ家^ノ父

晒^スる^レ友^ノを^レ隣^ノり^ノも^レち^ノと^レ鳥

そ^レよ^レ入^ルる^レ何^レも^レ出^ルる^レ鳥^ノあ^レ角

各録

西^ノ月^ノの^レ影^ノを^レあ^レる^レや^ノ若^ク菜^ノ摘^ル沙^ノ鳥

杭^ノ小^ノを^レ晒^ス乃^レ里^ノの^レあ^レる^レ鳥^ノ鳥^ノ角

望^ム人^ノも^レい^ハ若^クね^ハ牡丹^ノの^レ鳥^ノ麻^ノ父

延^ビ虫^ノ乃^レ子^ノの^レ草^ノを^レほ^レく^レや^ノ子^ノの^レ鳥^ノ巴^ノ丘

松乃草

加賀重次

山隣

秋ハ之家遠ク行キテ松の草

大名乃子小倉江川

持珠

有的ハ理三線ノ入

知角

去来を流すむきに加る事

山敲

長久を先神一色り候也

平哉

白子(とんけい)よこ次妻時

非亮

破事てう船便待川舟神絹

丈志

背かゝめ肩と人又巻ら水

沂青

推量ハ八卦を合以又珠院

ハ子

ハハ火燧の皮む以て是

隣

骨又柔乃張物と云く花

璞

法華北山の蕨めり

角

彼岸志やまきあを後生志

敲

刷毛てそ清る細工浪人

哉

碓に隣乃たう

亮

周

=

常盤の施さうと糸れかえりせて
 子あ第りあて橋桐の木
 名方の楽屋といふ屋乃也
 鴈つわると亭の方角
 二
 嶽の柄又類とのせある祖父の秋
 おきめてこゝに飛脚こり
 越路も待重山乃花の蔓
 志
 子
 角
 環
 此
 敵
 隣

毛々に西家のハミをきおとや
 亮

名録

い川中もあきにしてゆめ難い
 行秋と返して海原やもはる
 長橋乃月おを回身ちとく次
 きれくまて障様をまぐや風中
 掃たてらる筈もあはれ子るは
 夕立や空の雲にあをさ
 乎
 此
 非
 折
 八
 丈
 山

時雨乃松

出羽鶴岡

人を傘させりと松も時雨に

風草

子も雨もやせえの響に梅

松環

昔積さぬ経居乃氣を帯て

孝夕

花飾しも水理は流る道留

友松

月影も曇らぬ時後灰り鳴

安菜

侍の心ち此伽小促織

素後

法衣の氣は張弓よ吾我の秋

芦雅

菖蒲そとく湖の津米

千阿

障物もあま川とて山と坂

一飛

弓を勢荷を待てく小伎

林里

皮の目北掛つてを下法衣去

白々

日をあつて了福置の類杖

修九

葉をゆる祝井よ舞ふて行遊

兆而

新地の酒屋只も飲まざる

里枝

為帆子川殺生も乃多し

凡芝

聾もたつらまきぬる世

宇北

長老もくき世吐亦を合セ

千尋

子能の業も先九ふ出来

只白

思ふ折小忘れは露も月の笠

野秋

男山く風を忘やうと

杜由

三
途習ふ針子よおを思ひあか

魯子

まゝは屋所志くぬえ一掃

持三

際も来てさそひ世の外屋敷

十知

摘菜色行はく一山吹

執筆

名録

苗代は秋や焚きて神一扇

凡草

何れをけを志さくるの柳心

安業

お糸帯乃奥の月ゆく 蝶拂

友松

追ふにあちくむきあふ葉山字

里桃

酒花乃隣を白く梨の花 白之

鬼尻子の角ははゆき十夜に 魯子

廉乃唱而うてや疎鼓鳥 兆而

手もやけ小秋のまそく一鳥に 一飛

苗代よちよとくめのお栗山子に 素後

はく波は揖とる蓮乃う記系哉 十知

山よりハ型く笑ふて美^着あ^るの 林里

比良よりハ栗は小^中きく一智^者 凡芝

桐乃もの園扇入ぬや能古お撲 子峯

晴あつる空のやトや藤乃とも 燕雨

晴も山と目いまくそん度藤存 終丸

恙りさうて裸おせや佛生今 里枝

おのりもふと^は里^はる^る栞^に 子阿

久しゆて山も第や^りあ^の存 芦根

山ちや花さ^へ来^ぬ川^一種^何 宇兆

霞をぬ^り谷^を高^く一^種の^形 杜由

咲傾ふちまきくろくぬ様之那 李夕

雪の松 城後新居

山月を隣り持く松の雪 楚璞

洛州

新夜の差を破る燄掃 楚璞

茶漬下も春ハ欠使むらせて 桑圃

お菊と雪路のまきのせり 千株

澄月と酒したる不目を控ひ 竹風

湯阿うはる袷く初 香枝

七化の墨字跡出るるふな 巴洲

豆腐小ちとちおお談 兼久

行燈もう後くそて膏の口 渭流

るも嘶く市此仕合 超兮

河の山乃心も知事さ母をいぢ 始流

摘菜の笠よりまねて犯云 田龍

出都りハ公家も公を鼻に付 文先

一之能く日此枝ハかゝ物 倚風

暖帯に雨の志ありも久し 百程

二階を雨のかさふ掃除 恭賀

婦を来て母乃既痛を給り 巳午

糸に月も浮てる意あり 山亭

並杉小春以嵐乃車一送 梨洞

園子も化粧の筈おて付 鷹好

二ウ

薄乃入手を持ちうたもこ好 之虫

あんなさ巻清ふ出来るて空 岡一

重乃ふる枝多ふさえて國のを 比花

娘小姑りより一様室列 右兮

名録

風り髪ふてさそき申松の歌 竹鳳

長生乃松も何處にてもの中 此松

涼風の言生の暮し小松原 菖圃

積雪や炭を一夜のときり電 山市

有明乃橋小松はぐしそおのむ 千株

桃燈を指さるんし桐一葉 始流

共あるしと説き彼春乃橋は 巳千

初雪や琵琶湖の調子橋はく 梨田

宿越ゆるそとそあそみふは 巴洲

庚子ふたまたしはまゝちて茶摘は 宜由

摘神の暮りし縁ふや茶の匂 田龍

雪乃身の上とてはまや子規 雲枝

七種や八百屋の店の暮をりめ 百程

飛空や茶をせし蝶より文衣 恭賀

雨は痛く顔もくはは波萩の花 倚風

箒にをほく僕もよる茶ふは 渭流

若草や花吸ふ蝶も茶て行 右兮

鶴の橋乃あまうや森り登り 岡一

雪の寝る日ももしたに初とく 越今

車公此少る葉よあはる也衣配 應好

雪も也梅よ初もや葎の登り 之由

刈跡乃田よも雪や後の存 葉人

雪心よ初も花や陰天井 文先

初顔よ涼一かききて葉此均也 語洲

おとし 跡生の十日のち奥の首途の
後乃田交もは時の体をはくさんとすははる
波柳の名残もは初りしと再しはれ
中尔葉門此小才ハ井師の事言成
忘れしは初も再考乃神心を祝されさる
おとし葉も此一章をとり知てしは行義
里の一步成いさきぬ

楚璞

招きあはる松のよあむむあぬえ

去帆よ片帆り風の戸送り 湖秋

八景も九景も西あむ松よ出く 荷哉

名よ河あ鮫乃昔よ搦ても 詠桂

存も眉はくろく龍の舌ふり

百和

来て逢おはれ魔を傍草

一七と

質^ウ居くありと一度ハ京の土

呉竹

こら乃おふと女波に付てを

伍只

よみあつ降て門田を植仕舞

支川

馬も持ひ日人を持て日

文竿

押おの聲は温鈍乃俄子

丹井

西原磨まてハききんう物

之白

やしとかき歌り癒う癒うけふ

方石

使もこゆる老の俵もし

理石

古鐘の力にめしうゆえら

和仙

片屋の昔月ておまる日此御

二直

木塚の来てきんしきり草の花

徳川

摘草よ下^汰結をんぬて尼君

地撲

二
為孫よある時結もおしり

座竹

元てま居れと阿連も持山

跡迪

猪あけと跡一本松引て行 慕水

何所乃小僧も忍多申るそめ 金鯨

それ鞠の心寄り嬰粟のむらぬ 沃根手甲 桃溪

掃げハ吹こむよそ乃麦糠 持珠

汁立よ徳女内義の孫仕より 可貞

嘗の三十日掛の音つれ 十夫

傘かして拾門を出れそそ終 百什

法主乃隙を神へてまふ 持江

從虫を嚙も存りぬ我まへ 風枝

廿秋り枯梗小西ハ痛む 阿仙

すゝ好る暑さ忘れし所の衣 衣手甲 彦白

心も尻をかぬ亭坊 持珠

牧猪の糸を煮と登の傳うて 东川

室を晴あつて二十八月 和乙

海より宗悪人と顔を國地花 南秋

菊乃林下り鳥の精り 二風

名録

野山乃... 玉鳳
 楊老妪... 二直
 目小かく飯も喰... 梅泉
 枝豆又月も二夜... 九州
 名を... 丹井
 よ... 方石
 近ハ... 文竿

曉乃星の... 支川
 波乃... 江只
 松風... 吳竹
 八景... 一七
 雪乃... 百和
 松... 湖秋
 かき... 沈桂
 極... 荷元

外山より音のよもや音乃庭 万風

木々りやどふ吹ぬも松の色 王且

屠蘇の香れを仕出やふの菊 魯彼

摘みかきぬ物かてやぬのむ 疎迪

酔せよと松をとりぬく紅葉は 庭竹

十枚とハ豆腐小沍施のひりか 濠川

涼風をアんせくや草れく表 澗龍

鶯に泣きつく屋の垣のあけ 和角

湯阿りやとさ海にくもする松は 甫狄

長嶺の裾より海に石う那 东川

雞尾より吹かすむ柳は 二風

雞尾や月見の庭に標 和乙

木枯る裾をぬめりる夕日 彦白

虚を行て言ふは吹ぬやむのそ 吹ぬ 吹柳

り秋の木曾後ハ白一草麦畑 凉風

梅よ牙柳ふもする 藤の卯 玉杖

風流や秋立日くくよく如く
吾通

人丸まきもしてみ川部一公
十夫

二葉くく名ふまり月の桂水
桃溪

鐘の音や浮世に死嵐
可貞

秋立や柳を河川を鳴ふく
紫峯

稲葉乃あとい尾城くく草水
松堂

列國四季發句

京

柳後室

秋立やきつふ乃をのまゆ

長門と越向ううてや燈火燧
山只

心あやみ顔一葉やうくの秋
范亭

緋素をかくして一を極う系
杜吾

恨ふき草のおもてあふの月
右範

麻北んぬお葉や葉の流一葉
六芝

手深ふる舌もいとく桔梗水
東好

一と勢の瘦をかきよる此山 伊集
 丸寝さるる力ふもさくらし瓜のを 不香香
 釣を小帆りけてかきん星定以 分斗
 花野いそを咲は白田の籠取を 呵考
 野よ咲て木芳志くぬむけけは
 網ふくえ何漕や釣の急ひを謀 故洒
 是那への清水流おや舞うり 随風
 咲よりもちるを始ぬや舌の舌 有琴長良

笠もさるぬ後も暮きく田植心 文可
 雞よいかり舞うり 猫乃魚 呂杯
 山の裾をぬくせきくはしり水 仲志
 時ふりてせりり秋を志思とうか 波岸 三平
 花野いそを咲は白田の籠取を 依太
 仲人の大子の橋や天の川 更前
 是火や所乃焼籠ハ情る時 桃古
 山古を包む茂里也 鐘の音 子禹

質屋より脱てアセリ更衣 杜竜

昔や鏡のセリ一光を啼 笠松 車支

かけろふやあを布ら次芝の上 松流

アん達くも堂や魚屋の基ま 海童

山古乃ゆきそめさぬさぬ 大垣 松

火燧よりぬげ色も阿う猫の巻 史仙

道たこ此故屋釣草に空 仙布

女等の舞ふ空より近一初時 左什

三日存のあと引をく尾 隆五

因乃骨をアんセキるさ 東家

机して古子うぬ 字推

風狂も望みのいと乃 東孝

相乃山の裸アんセリ 和菊

年の尾や姉うかく 麦里

起る時ふあ 鳥六

さるるも 梧夕

水仙のふや隣りて葦たさけ
岩村 推巴

福里壁の極の黒くやをくむ
回互

蝶乃目小を川野の葉の横うか
白外

もれふとるるんく山や時鳥
國推

噴や名跡のそれ乃志りし
六松

そのむ乃悲後とを覚えて瓢
玄波

追ふる涼三つるや大根外
揚水

廣沢乃雲やうかめて飛
野泉

朝うやもさす小はむや星
枳蔘

城直次山をあらたや反用さ
比羅

笠を今もむう男の躍うか
投遠

指をせて尾をい老ぬらふの葉
章次

白山の裾う志ろく我をもむ
鹿角

くくぬれ子のもまたくる柳
閑芝

葺鶴乃山を代れやもとの道
栞石

すなよまに七の加減や花の雨
翠水

云

廿一

初時高き山留りてちるあを 金沢 甘藷守
 糸付く力やのしる輝のう 糸 素然
 雪板乃ち雪を雪まけ山さく 里 里如
 沿毫乃忘ハ 表 雪や冬玉掛 山 山降
 雪ふかす隙を縫えてや冬威 ツタ 松睡
 立ゆハ磁めぬ雪う 暮 暮の夜 半 半睡
 射鳥や持佛のふハ雪のま 枝 枝如
 久年母此れハ阿婆く 外中 外中 方 方登

谷合や菜碱ましく 維 維のう 風 風吹
 呼ぶも縁小遠く 豆 豆腐煮 一 一葉
 懐の葉もよ 習 子葉のあ 眉 眉泉
 鴉子(夜) 山 乃お 不 不 後 後 る る 園 園
 目小 ア ア て て 孫 孫 若 若 や や 晒 晒 杭 杭 互 互 道 道
 梢 も も 屋 屋 の の 窓 窓 吹 吹 り り 時 時 鳥 鳥 杜 杜 亮 亮
 干 物 物の 室 室 を を う う け け 今 今 ふ ふ ほ ほ を を 記 記 成 成 千 千 林 林
 抱 り り 此 此 あ あ ら ら ぬ ぬ 秋 秋 の の 鏡 鏡 の の 形 形 二 二 川 川 トヤ トヤ

卯の志や神・楽し女乃種まきし 山阜
 美書乃羨りともおれや蟋蟀 倚柴
 炭竈乃烟りほくや吾の道 一酉
 朝うふの植ふ神の屋はさき方 白推
 鮫の名もあうん桃の小まき 魚は 倚考
 司此日の山や吾を脱う人 貞唐
 さくらう繼て吾哉吾の柳心 左明
 星此夜や女房まうらば酒乃橋 糸川 九蚌

摘時ハ振神アんせぬあなは 柏サキ 朱名
 蝶乃おと河川知んて笑や野石所 桃言
 入月を呼ももしてや時鳥 出や草 圓石
 鉛糸や桜らるる也山お路し 洗柳
 笠紐小何まの志アんやおも寝は 紅枝
 鴻系又夜をい別しは子の内 日西 小冥
 七夕や陰師の娘も忍のたむけ 仙船
 七乃嘆しうとさささ 柳心 浮涯

卯のをもれほほや浪乃釣るけ 其山
 浮櫓を風乃樹る柳 此 蛭子³²
 川跡乃あるとれを粟此鶴³¹ 雲二
 天北戸の簷おろ次也柳月 柴田 梓仙
 行長乃山後や市に岩川¹ 一志
 涼風北を記おろ次作の一葉² 其士
 秋の勢小子を初儀の勢³の勢 虚舟
 鷹の柳をちれや⁴乃月 笑^笑

風乃奥の手んま乾音吹¹ 嵐柳
 塗笠を袖屋むすれ出て仏生² 汗虹
 名月や明とハ咲て侍もかの屋 村上 知来
 姐板小豆腐ハさ初³ 大師⁴ 坂田 南江
 松風をアんとて海る時⁵ 鹿柳
 行秋やいろえ⁶の山を並みやけ 越前 島巴
 床地⁷のふたのふきや郭⁸ 出中 倭泉
 碎犯⁹此中をく¹⁰し¹¹は¹²を¹³笑¹⁴ 老後 時人

諸國文通

俎板小猫たすきさきや芥菘
 乙申
 高北跡蝶よかろ知多松柳りか
 春波
 花乃咲木恥し身微うか
 整環
 松風乃阿ハぬきくや跡と記
 指三
 手習此師通の書居梅の花
 フハリ
 七夕の燈子ねやその中二階
 作囊
 葉ふさる小神も裾よ離あか
 林五

寂しき乃是はくれとや教不素
 江戸
 涅槃云の後ハ屋子乃建ひは
 整環
 名存乃道きくはくふ野と
 小
 葉くまきや爪も福耳ふ希の沙汰
 千丈
 魚箒乃捨てハウ一魂まう里
 ツルカ
 名存や湯と物あそ一法利
 去板
 名存ふ人の曇らや草一畠
 整環
 切着よこ月燈一扇の弦
 反浦

ちりんとてや柳に初あり 長サキ

行秋や班女う関乃甚きれ 江

星倉也難のこられと人の上 江

代くまらる痛乃夜明う然 杏王

痛坊や老も屋のたぬ荷ん 地少

め家也る此上の虫の夜 出

水仙や人目を苦もあさく時 を紅

炭電の火をまこく 庭長

掛乞よアアと来て百ぬけ涌は 百蒸

家あいらく 亡人

約下結も通いぬ庭や五月前 可甲

屋敷やつる乃灸まると 更苗

傘乃舌や戸口の厄掛 左言

破鏡よとや月も月の懸うぬ 如氷

傾城乃神考よまるとあやめは 武湛

何やあさく新や都乃草の庭 ソハク

病中一巻

採^ル熟^ク粽^ノ乃^レ被^ルや按摩^取
出せサキ 東圭
 葺^ク物^ヲ和^シ枵^リ掛^ルる^端と^竹立
長正 南嘉
 脱^ク之^ヲ狐^ハも^との^多及^レ比
黒トリ 志凡
 昔^ノ乃^レ湯^在在^目と^り着^美ふ^の形
五泉 捨九
 子^ハ仇^ヤき^のみ^をの^ころ^を合
フライ 毛漢
 嘗^ヤも^もそ^め乃^レ葉^はは^くつ^れ
大和 茂秋
 穉^ハや^セ夕^チあ^るハ^わの^き時

柳^ノ少^キを^ゆて^て桃^ノ日^和の^ち
フライ 有施
 竹^ノの^みを^懐も^る利^ハ衣^の
巻後 吾胤
 精^寢乃^レ夏^ハ短^ク一^梨嬰^虫の^屯
ソハク
 蚊^ノの^存も^と形^ヲ枕^ヤき^りも
トマ 丘
 燈^をけ^て有^よま^きけ^とや^時を
金沢 席柳
 屋^を乃^レ窓^をと^きく^や橋^の方
伽涼
 川^并乃^レ屋^をを^持る^尾志^はか
本所 英美
 小^判も^ゆる^やお^美の^稻荷^山
ツルカ 暹舟

川寺も障子ひとくや夜隣
 歩行町も和く萩の折戸
 雙店や室も礎乃夏く
 松風の風戸ふさるるあ難
 木枯嵐やうかろるも宇山
 牛の子乃近は後や世
 口まきて伏んふ福やぬ子
 吾れあるをを也アて梅の志

紀外
 季和
 ソハク
 吹九
 廿又千花
 宇山
 東宇
 負旭
 千代

一八や西施々物をりく
 糶少を似ぬ兄やや玉の梅
 ちりめ乃乃乃ほくさ
 初秋しまいあをさ
 旧を伐きも雲くや
 梅の花をわきまは小
 花乃後洗をてて若葉
 名のおはまかへり山さ

兼旦
 梨
 フハ
 ちサキ
 カ
 加十
 カ
 風曲
 為逸
 通女
 ソハク

松の家
生可か笑

野も山もまじりて
英良おあ

眠るから夜をぬき
鶴仙柿

卯のむすぶ乃をよきや
理石

手よささる月ハ泣け
磐肥及

涼引や橋とあそぶ
語乙

陽豆腐にせんく
阿東武

昭和十四年八月二十日
原本 萩野清氏藏
寫校合了
俊定

